

巻頭言

3カ月のアカデミー生活が終わりに、9月22日、修了証をいただいた。山暮らしを楽しんだ一方で、アカデミーは土佐山の人たちにとってはどんなに映っているのだろうかということを見問する日々でもあった。

あるウェブ雑誌にアカデミーが「アミューズメント」であるというようなことを書いていた。なるほどそうか。学舎などと堅苦しいことをいわずに「遊び」と考えれば、3カ月遊ばせていただいたことになる。

中村健太さんが最後の講師としてやってきて「仕事」と「自分事」という話をした。辛いのが仕事で面白いのが自分事になる。合点のいった日々感謝したい（伴 武澄）

あるものを使う

高田憲明

東京の青梅に住んで2時間かけてIT関連の会社に通勤していたが、3・11後、自分の生活や働き方をもっと自然と調和したやり方ができないか模索してきた。

土佐山で新鮮だったのは、必ず知り合いの誰かと出会うことだった。大きな家族みたいで安心できた。来たばかりの時はなんて道が狭いだろうとばかり考えていたが、別に狭くても大丈夫なんだと自分の中で気持ちが切り替わってしまった。

炭焼きだとか、自然が持続していく

メカニズム、人間の地球生命体としての役割など多くを学んだが、「大崎さんが言っていた、あるものを使う」という発想を得たことは大きな収穫だった。

これから、農業を基本に生活+複業（ナリワイ）で生活設計を立てて、思うことを実践し楽しんで発信していきたい。

土の人・風の人

吉本紀子・岡田麻美

都会育ちの私たちは故郷という意識のないまま過ごしてきた。3・11後、故郷って何かを考えるようになった。土佐山には古くから住んでいる人が多いが、移り住んできた人もいる。双方の観点から故郷についてインタビューした。

別の場所に引っ越す予定はないという。

車さんはパン直販でおなじみ。市内でパンを作っていたが、息子さんが土佐山で職を得たのをきっかけに13年前に引っ越してきた。土佐山で仕事をして変わったのは、パンやジャムの素材を地元で集められることだった。印象的だったのは「いろいろな所で住んでことのある人はそれぞれの所で楽しみを見つけられる」という言葉だった。

吉本 親も転勤族で自分も移動しながら暮らしてきた。大崎裕一さんは高校、専門学校と市内に出たが「殺伐としている」と思い土佐山に戻った。アカデミー生の中ではミスター土佐山的存在で、さも土佐山が好きでたまらないという印象だが、本人は「どこ



岡田 1年ごとに住む場所を変えてきてまだずっと住みたい所もない。木田さんは26年前、大阪から高川に引っ越した。当時、田舎暮らしは珍しくみな歓迎してくれて、新聞にも取り上げられた。土佐山から中国に留学して東洋医学を学び現在、市内で診療所を開業している。土佐山が気に入っていて

も同じ。人間は自然の一部としてどこでも生活できる」という。

将来については「山の魅力に気付いて戻ってくる人も増えると思っていた。山を楽しみながら外の情報も入ってくるにぎやかな場所にしたい」と語った。

網川地区の前田恒茂さん、広見さん

夫婦はおじいさんが兄弟という間柄。都積地区で生まれ育ち、結婚後に網川に移った。娘さんのお婿さんは市内の人で山が大好きで林業を営んでいる。土とともに三世代がともに暮らす理想的な土佐山暮らしだが、娘を山の人と一緒にするには積極的でなかった。「顔見知りばかりでうわさ話で気を遣う」というが、二人三脚で息の合った夫婦だ。

4組の夫婦の話聞いて共通していたのは、住んでいる場所で楽しんで暮らしているということだった。

ナリワイ

植松純平

11年やって来たウェブの仕事辞めて、次の仕事のきっかけをつかむためアカデミーに参加した。

仕事は一つなのだと思っていたが、ここで学ぶうちに「自分が身につけられる技で生活をしたり、小さな仕事、リスクの小さな仕事など自分のペースに併せていけば生きてける」と思うようになった。

『ナリワイをつくる・人生を盗られない働き方』を書いた伊藤洋志さんの講義の話はとても新鮮だった。そもそも土佐山の人たちはそういうことを自然にやっていることも気付いた。

アカデミーが終わったらまたウェブの仕事に戻ろうと思っていたが、今ではもっとチャレンジして別に職業訓練に行こうと考えている。

畑をつくって自分で食べることもナリワイの一つだと学んだことが一番求めていた答えとなった。

地域

原田沙央理

福岡で地図の会社で働いていて去年から、稚内で商店街の活性化に携わった。でも短期間で成果を上げるまで

いかなかった。

アカデミーに魅力を感じたのは、「100年先を考えた持続可能な社会を目指す」という考え方だった。

これまではヒトのことばかり考えていて、自然の中にヒトが暮らしているという感覚はなかった。

徳島県神山町のグリーンバレーの大南さんの発想は面白かった。これから人口が減ることは仕方ない。減る中で村の課題を解決してくれる人材をターゲットにして優先的に呼び込んでいるというのだ。

アカデミーでは全体でヒトを育てるという考えが根付いていて嬉しかった。地域を100年先も続けるためによそ者に頼りすぎるのはよくない。地元の人たちが感心を持つべきだ。

まずは稚内の人たちとアカデミーで学んだことを共有したい。いつかどこかに根付いて暮らしたいと考えている。

土佐山でやりたいこと

伴 武澄

9人の受講生の中で一番近くに住んでいる人間だが、森と水に魅せられた3カ月だった。

土佐山で得たものは一つ、「出会い」だと思う。自慢できるようになったのは竹割りかもしれない。切り出しから竹割り、ナタとノコギリで・・・外に点火してある竹製のロウソク立ては50個ほとんど自分がつくった。

土佐山でしたことと言えば、まずアカデミー新聞をつくったこと。それからブログで28回、土佐山日記を書いた。いずれ本にできたらなど考えている。それから、道案内の看板も3つつくった。ゴトゴト石と山嶽社跡の分2つ。明朝、道ばたに置いておこうと思って

最後に何をやりたいか。シニアのた

めの木工部屋をどこかに作りたい。自由奔放に遊べるアミューズメント空間が土佐山にできたら素敵だ。

土について学んだこと

金 光子

アカデミーが掲げている土と水という概念に惹かれてやってきた。

生ゴミから堆肥をつくる講座ではミミズ3000匹による手法が私たちの課題だった。最初は臭くて吐きそうになったものが、時間とともに臭いが減って、面白いことに3カ月経った今では土の臭いになった。

生まれて初めて「まさ土」を食べた。何にも味がしなかった。これでは植物も育たないだろうと実感した。

早朝の種まきでお世話になった優作さん、土佐山特有の対比「モコモコ」をつくる坂本博さん、パーマカルチャーの四井真治さん、土について学ぶことが多かった。

久万川の夏祭り「阿弥陀さん」の飲み会で門田景旭さんに「土を食べてみなさい。身を以て学んでほしい」と言われたことが心に残っている。

食とスタードーム

藤田紘子

料理人を目指し、地産地消の店を開きたいと思って土佐山に来た。店をつくるには種や肥料にもこだわりたい。野菜も見える形で作りたい。

スタードームは竹と紙でつくった半球体のドーム。最小限の材料で暮らす空間をつくろうという試みだ。紙は地域資源としての町の土佐和紙だ。高岡さんに無償でいただいた。

本来、満天の星の下でレストランをしたかったが、今夜はあいにくの雨だ。

イノシシの肉をワインで一昼夜煮込んだシチューが出来上がっています。ぜひ召し上がって下さい。